

「梨栽培塾」技術伝え12年

後継者を育成

JA南彩 300人が受講

久喜、白岡、蓮田など県内有数の梨産地を抱えるJA南彩で、梨農家の後継者や、梨に関心のある人に栽培技術を一から伝授する「新規梨栽培塾」の活動が続いている。今年で12年目。これまで300人あまりが受講し、梨産地の維持に一役買っている。【萩原佳孝】

産地の維持に一役

塾を開ききっかけは、同JA技術参与の水戸部満さん(73)が、剪定後の枝拾いなど単純作業に従事していた女性から「栽培技術を覚えたい」と相談を受けたこと。

県内の梨栽培は明治



JA南彩技術参与の水戸部満さん(中央)から、古くなった大枝の整理について指導を受ける梨栽培塾の塾生たち。久喜市太田袋で。

から100年以上の歴史があるが、後継者不足が大きな課題。同JA管内でも2010年には441軒の農家が232畝で梨を栽培していたが、21年5月には202軒、86畝と減少が続く。こうした傾向に少しでも歯止めをかけようというのが塾の大きな目的だ。

今年度の受講生は36人。若手後継者に加え、

定年後に美家の梨園を引き継いだという男性、梨が大好きで梨栽培を始めたいという主婦、脱サラして梨園でアルバイトをしながら将来的に独立を目指す男性など、経歴も年代もさまざまな人たちが一緒に学んでいる。

講師の水戸部さんによる実技指導を中心に、講習は月2回、各2時間ずつ。梨栽培の

枝を大胆に整理し、品質向上や収量増につなげたり、インターネットを活用するなどさまざまな工夫で販路を拡大したり、と意欲的に経営に取り組んでおり、塾生の中でもリーダー的な存在という。

さんの説明に熱心に耳を傾けていた。鈴木さんは「水戸部さんの塾で教えを受けたいおかげで、多くの仲間とつながり、日々新たな刺激を受けている。私たちの活動が地域社会を支えることにつながれば」と話す。水戸部さんは「梨栽培は楽しく、やりがいがあることを知ってほしい。多くの人に気軽に参加してもらい、一人でも多くの担い手を育てることで産地の維持につなげたい」と話した。

年間作業スケジュールに沿った実践的なカリキュラムが組まれており、「習ったことを持ち帰り、すぐ復習してもらえるようにしている」と水戸部さん。参加資格の制限はなく、いつでも誰でも何度でも自由に参加できるのが特長で、必要な講習だけ選んで受けることもできる。

11日にあった今年度第14回の講習は、塾生でもある鈴木精一さん(62)が経営する久喜市太田袋の「ぴかいち梨園」を視察した。鈴木さんは大手梨農家の長男で、子どもの時から手伝いをしてきたが、6年ほど前から「水戸部塾」に参加。2年前に60畝の梨園を借りて独立し経営を始めた。現在は80畝で10品種を栽培。古くなった大